

きやう口傳、火のとりやう口傳、香本置やう口傳、記録書やう口傳、點に口傳、
一連理香

一二三四五試あり、札十二枚、五包十種に打合事、香たきやう、五度ともに一二をさだむる事、香
本點の事、おのく口傳、

一鶏合香 盤物 一蹴鞠香 同斷 一煙競香 一星合香 極秘 外ニ宗阿彌流星合
香志野流星合
香 此三色はかるし 一住吉香

〔古十組香秘考〕古十組香總論

古十組香は、本書の序中に見へし如く、細川幽齋子の集め玉ひしものなり、十炷香はむかしより
ありし也、宗温の書中におさなひ人の十炷香とて、もてあそぶ時のつゝ、み候ごとくと云文章あ
れば、其まへよりもありと見へたり、誰が組し事をえらす、其外の組も誰が組しや考べからず、本
書の如く、十品に編しは、幽齋子に起れり、其むかしは此事あれども、筆紙を以て文章に寫し來り
しは、細川氏なり、或人云、これを十種香と云、因て十種香の會、十種香道具など、俗に云ならはせし
も、むかしは只此十組ばかりなれば、まか云しとかや、さもあるべし、十炷香と書ときは、一ツの組
香の名となるよし云り、すべて此十組は組香の濫觴にて、萬の組香も是より出で來るものなり、
米川常伯世に出て後、香事一變す、十組香も古のもの組かへられぬ、源平を以て名所にかへ、郭公
を競馬にかへ、鳥合を矢數にかへて、家の十組となせり、今世上徘徊せる香道具、多くは此十組を
入れたり、

〔香道眞傳上〕十組之習

古へ十組香と名けしは、十炷香、花月香、宇治山香、小とり香、郭公香、小草香、系圖香、十炷燒合、源平香、
鳥合香也、近代米川常白十組を改、郭公香、鳥合香をさりて、矢數香、競馬香之二組を入、系圖香を補